

第49回 コンチェルティーノ デイ キョウト 定期演奏会

49th CONCERTINO DI KYOTO

京都コンサートホール
アンサンブルホールムラタ

2007年11月18日(日)

開演 14時

主催 才能教育研究会京都支部

PROGRAM

ヴィヴァルディ
合奏協奏曲 「調和の靈感」 第4番 作品3-4 ホ短調

- I Andante
- II Allegro assai
- III Adagio
- IV Allegro

ヘンデル
合奏協奏曲 作品6-12 口短調

- I Largo
- II Allegro
- III Aria larghetto e piano
- IV Largo
- V Allegro

バッハ
管弦楽組曲 第2番 口短調 BWV. 1067

- I Overture
- II Rondo
- III Sarabande
- IV Bourree
- V Polonaise
- VI Menuet
- VII Badinerie

指揮 江村 孝哉

ペルゴレージ
コンチェルティーノ 第4番 へ短調

- I Adagio
- II Da capella (Presto)
- III Andante comodo
- IV a tempo giusto

モーツァルト
ディベルティメント K. 138 へ長調

- I Allegro
- II Andante
- III Presto

指揮 新井 覚

MEMBER

石原 真衣 (才能教育研究会京都支部フルート科)

小学3年からフルートを始めました。研究科卒業の時には、コンチェルティーノの伴奏でモーツァルトの協奏曲第2番のソロを体験しました。今回はソロというよりは、皆で気持ちを合わせてということ大切に演奏したいと思います。頑張ります。

コンチェルティーノ ディ キョウト 才能教育研究会京都支部の最上級生で構成される弦楽合奏団で、昭和34年の結成以来年1回の定期演奏会を開催し、また卒業演奏会において伴奏を担当。過去にモーリス・ジャンドロン(チェロ)ルイ・モイーズ(フルート)フェリックス・アーヨ(ヴァイオリン)といった演奏家と共演してきた。

指揮	新井 覚	江村 孝哉			
ヴァイオリン	山本 佳奈	妹尾 俊吾	石田 悠	磯貝 碧里	
	井狩 苑子	上田 彩希	福永 祥子	森田 彩葉	
ヴィオラ	佐々木めぐみ	江村 美由紀	江村 孝哉	佐々木弘明	
チェロ	森田 健二	一楽 恒			
コントラバス	糸山久美子				
チェンバロ	永田 悦子				

曲目解説

ヴィヴァルディ 合奏協奏曲 「調和の靈感」 第4番 作品3-4 ホ短調

ヴィヴァルディの研究は19世紀後半になって、J. S. バッハ (1685-1750) の作品うち10数曲がヴィヴァルディの作品を編曲した物だと判明したときから興味を持たれたのが最初であった。それまでは歴史から全く忘れられた作曲家のひとりでしかなく、1926年になってイタリアのトリノ大学図書館で膨大な数の協奏曲を含む自筆譜が発見されて、初めて活動のあらましが確認出来るようになり、イタリア後期バロック期の作曲家の中で、どれだけ偉大な存在であったかが一般に知られるようになった。「調和の靈感 (L'estro armonico)」というのは、ヴィヴァルディが最初に出版した協奏曲集で、伝統からの束縛を脱して自由に想像力を発揮する、といった意図がこめられているようである。第4番は4つのヴァイオリンのための協奏曲で緩・急・緩・急の形をとっている4楽章形式の協奏曲である。第3楽章のアダージョはきわめて短く、前後の早い楽章をつなぐ意味しかないものと思われ、このようなものはコレッリの協奏曲などによく見られるものである。

ヘンデル 合奏協奏曲 作品6-12 口短調

ヘンデル(1685-1759)の全12曲からなる作品6の合奏協奏曲は、1739年に1ヶ月余りの間に作曲され、翌年の4月に出版された。ヘンデル54歳の絶頂期の作品であり、彼の器楽作品の中でも最も重要な位置にあるものといえるが、様式の上では25年も前に作曲されたイタリアのコレッリの、やはり12曲からなる作品6のコンチェルト・グロッソと関連を持っている。コレッリのコンチェルト・グロッソでは、多くは2本のヴァイオリンと1本のチェロからなる独奏楽器群(コンチェルティーノ)と弦楽合奏群(リピーノ)という対比的な楽器編成と、<緩-急-緩-急>という教会ソナタ風の4~5楽章の構成がとられ、それが「コレッリ型のコンチェルト・グロッソ」とも呼ばれて、いわば古典的コンチェルト・グロッソの典型とされていた。ヘンデルの作品6もこの系列に属しているのである。これに対して、この型のコンチェルトを発展させ、一つの楽器を独奏楽器とし、楽章も<急-緩-急>という構成を定着させた作曲家として、トレッリやアルピノーニ、そして完成させたアントニオ・ヴィヴァルディである。

バッハ 管弦楽組曲 第2番 短調 BWV1067

バッハが作った管弦楽組曲（現存するのは4曲）の中で、もっとも有名な曲で、フルートが独奏楽器のように活躍し、フルート協奏曲的な雰囲気のある曲。後半の舞曲が続く部分は、親しみやすい旋律の曲が多く（特に最後のバディネリ）、バッハの曲の中でも特に親しまれている名曲である。

第1曲 フランス風序曲。全曲の半分近くある長大な楽章。付点リズムとトリラーが特徴的なグラヴェで始まり、中間部はアレグロになりフルート独奏が入るフーガ、その後、再度、最初のグラヴェが再現。

第2曲 序曲に続いて舞曲が続く。最初はガヴォット風のロンド。哀愁のあるメロディがリトルネッロ（反復楽句）として何度も出てくる。

第3曲 サラバンド。ゆったりとした荘重な舞曲。フルートと第1ヴァイオリンがユニゾンでメロディを演奏し、カノン風に展開していく。

第4曲 ブーレ。フランス中央部のオーヴェルニュ地方起源の舞曲で、歯切れの良い4拍子。2つのブーレから成っている。第1ブーレは、全楽器のトゥッティで演奏され、第2ブーレはフルートが軽やかなソロを聞かせ、再度第1ブーレが戻ってきて終わる。

第5曲 ポロネーズ。ポーランドの宮廷で流行した舞曲。2つのポロネーズから成っているが、第2ポロネーズは第1ポロネーズの変奏になっているのが特徴。第1ポロネーズの主旋律が、第2ポロネーズでは通奏低音に現れるのが面白い点で、その上で華麗に動くフルートも聴きもので、最後に第1ポロネーズが再現する。

第6曲 メヌエット。フルート奏者は中休みとなる、のどかな感じの曲。

第7曲 バディネリ。全曲中いちばん特徴的な楽章、バディネリというのは舞曲名ではなく、「冗談」という意味。こういう曲を最後に置いた辺り、バッハにも意外に洒落っ気があるのかも。弦楽器のスタッカート伴奏の上に、フルートが軽やかに動き回り、フルート奏者の腕の見せ場となる素晴らしいフィナーレである。

ペルゴレージ コンチェルティーノ 第4番 短調

ジョヴァンニ・バティスタ・ペルゴレージ(1710-1736)は、18世紀中葉以後のオペラの歴史に、ひとつの大きな転換を与えるきっかけとなった作曲家として名高いが、その評判が逆に、ペルゴレージの音楽の真の評価をさまたげる原因ともなってきた、とも言われている。20世紀の前半に出版された『ペルゴレージ全集』には全部で148曲の作品が収められているが、最近の研究では、そのうちの約5分の4が偽作か、偽作の疑いのある作品であることがわかって来た。ペルゴレージ作として伝えられてきた作品がこれほどに多い理由としては、その死後に急に高まった名声にあやかって、意図的に、あるいは誤って、ペルゴレージの作とされる作品が続々と出版されたからだと思われる。

「コンチェルティーノ」もそうした作品の一つで、現在では、18世紀オランダの貴族でネーデルラント共和国の外交官を務めたヴァッセナール伯爵の作品とされている。

モーツァルト ディベルティメント K.138 長調

モーツァルト16歳の年にザルツブルクで書かれている。ディベルティメント(Divertimento)とは、日本語では一般に”喜(嬉)遊曲”と訳されているが、「娯楽」とか「慰め」とかいう意味で、当時の王侯貴族の会合や食事の際に演奏される娯楽音楽のことであった。楽器編成はさまざまだが、概して小編成の室内楽風で楽章の数も6楽章というのも多かった。モーツァルトにはディベルティメントと名付けられた作品が約30曲あるが、その多くは一見娯楽音楽風に見えながら（聞こえながら）モーツァルト美の極致とこまやかなペーソスにあふれたものが多い。いずれも、イタリア風の瑞々しい感性に満ちた親しみやすい曲である。

次回予告 **50周年記念定期演奏会**

2008年10月11日(土)

京都コンサートホール大ホール